光壽新話

多儒宇佐喜

二篇

へ 13
3226
2

へ1
3226
2

昭和十年
七月四日
購求

序

蓮池菴主人が一家の製作人情本てふみの所に至り盡せるを讀て
蓮葉ふかけるを露わど卷毎ふ
玉を注ぎ種々の姿

江戸　中橋の邊住　桃江園　傳

世界の里と云へる月乃名所今ふたゝび軒
より出て軒端入桂男の風雅の町〻三五
夜中ハいつゝ更ゆゑ晴日ハ人の通
人の中へ出店ハ東隣堂五蝶堂稲彦
販元ハ上梓堂玉字佐喜月の名所
の名所ハ人氣ふ合作意ハ中本
を移し逝向ハ外題ハ知ル人情

寶の元祖牡訓亭ハ例の輝ある筆ハ
あやゝ結びハ洒落ハ繻子の帶解〻光
艶ある水道の水ふ照ハふ金波と玉兎
千里ハ走ル流行乃新版ハ壽ぐ為ハ

東都の為永を弟子連
尾張の好男子

花山亭笑馬

新玉の春の年玉恵方土産のまゆ
玉ゑも眼玉を洗ひ〳〵作者の用心金
玉も法皇かくと〳〵見て賀連ぶ玉をつく
祝〳〵序言紙すりて玉鬼の子の子紙
磨き〳〵此字佐喜と称らまた願ふなん

江戸人情本の元祖　蓮池菴
為永春水誌

久松ハ似るもの丁稚の好男子
吉川亭為永桃水

あらそふものは
袖のそろはず
なごや 春常

三度のつまるよりは八百屋のあとの取返しの蝶
狂亭春蝶
おくの蝶

判次郎

先達新話 多滿宇佐喜三編上の巻

一名曰 ちゝくらべお半

江戸 狂訓亭主人作

第七回

周防の内侍二條の院ゆく春の夜ゆ枕もぐるゝとものび
やかいひけるを聞く大納言忠家ぬし一徳を簾の下より
きゝ入てこゝとを枕ゆとあり是ぞ内侍名あくぞ
春の夜の夢ぐるりあるを枕ゆ
かひなくこゝん名ゆをきゝけり

とよめるまことぞ眼のもちる紅蓮のまろぐ〳〵
〳〵もあらぬよりも眼の新あく活業をあはとまもるく
れむ男をえらぶ程〳〵身を稼さるとあるは一角の人
うで欲ふのと眼をうまし分眼をちぐるゆえ後悔する者
世ふ家〳〵くく教訓しても輝局女郎の如く男の数を重
ねく恥じ思ひ彼ふ身を上也是ふ淫ひ拘のふ是ふ又
優しく外へ心をうつを新ひ世ふまくあらぶ貧乏も後有も
そ家〳〵の家りあまばうあらぶ者を組くし〳〵実の

男をいやしめ其身の実を立ぶて衣裳の立流輝昇の
さ〳〵ときまふふ実のおとあひ〳〵ふる後ふとを手うへば
天の恵めく来ハ立身出世し〳〵他の衣をえうを日のえ
敷色をぐふふ自惚して若き時ふ業えうとも不実の將
が退ぐうく終ハうの身とあるふ疑ひあり〳〵あらぶ
多欲を捨〳〵て時節をまち幸防まるを用遣出世の
種と命得変〳〵く虚嘘の甘きことばふ〳〵口入輝を
衣人の為ふ身を札付とあるまふふ家札を買ぶとも寄る

わどの運があるべ一とよく思
業をなすことを弟を思ふとも素人の姫ご女郎の
ごと紀活業をもる者あるべ一を
主流なる長崎を思ひ出せば大なる罪人なり
分のおごりハいかゝ他も思ふこゝをなるべ他人ハ
すぐ悪きを示も悪人とハ世間なる来
遊女の延命ます小有りがが初編ハ長が家とハ後
小ハ人形踊りく金沢屋福義場が下女ハ
ものなりる仁政あり元御代なるこゝ陰ごゝ八四年
の天敵の不祥見ゝ一代沢業八ゝ世を
あるうる紅生の宮貳家の女中の南下りなるべ言ハ
あることなるこゝ性ゝ悪ゝ豊居の隠ゝ陽田ハ見者の
見堂浦堂ゝ行遊ゝ那業のゝ家を彼下女のハ
つくゝうちうゝ八ゝうゝ遊いるゝご番下りゝ者見ゝ
のゝ長師ゝゝゝゝ出ゝ八ゝゝ長地ハゝゝ
も仕ゝゝゝゝゝ一日二百乗屋ゝゝ豊居を取ゝ目書堂

井の端の
松の木陰に
水汲と
志賀のよもぎ
えみしの
墓明

でもいつて掬びあげものゝごとくたましひを肩に茶柳で水のみ
をあ見鏡の口の勝次表を覗き午後の方より傳通の
行燈やかま 〽ハテナトいひながらおもむき背中をうつく 〽アヽびつくりし
ちよつとやゆくのはおのろとんどめ 〽ヲヤヱヽでも一人やすがいかうて
こいの男もあるハナおどろしいが嫁さアおめへのゆき男を嫁入て
やうがゝゴウ京を逍遥しく独り者せつかくねさのが 〽アレさう
お宿ゆりすがの花見がのと立派におつていうてもよく連
さう長しいとかんかさ 〽ヲヤなんの長いふのがあるまいの自分

も野暮にはいかさねへが面倒なり一寸座敷へいつて来りやいいと
ふしぎと一晩も止まつて来るス 〽ヲヤ／＼どうしてそんなにつれなげ
できるものか 〽ナゼおめへの宅の内室さんも世話しいか 〽ナニ
世話くはおかみさんがめへほどこそ私共はちよいと座敷へいかねへぞと
いひますがネ 〽ヨウ 〽ナニきまつたものかそしてくおめへなんぞは二十とせが
そいねはきざらア目前ではおとなしくも往まへほど陰ではちやと
手をつけてものをいひなさる人がよらふぜ 〽ヲヤなんにをヱ 〽何をさ
ちやアねへおかみさんなんぞといふものはヨウおかみさんといふものは新ぬれし

ところやアグつ　ところのハ人ナ　仕公人ハ　稽ご　拵ふものを
いハ　ものこと　をふ　ヨ　ヨ　ちゃめどんハ　ものを　ふ　ごの
ヨ　ちらくでも　ものこ　三月ク　三月まで　居ヨうと　ものこ　ものくけ
りやア　其ヨ　門宮さん　もへの　拵ごア　ちゃ　ハとが　初ナ公
ざの　ア　ちごめて　ものこ　さまて　ト　涙ごも　ヨ　ヤ　ものの　ものこ
子ごもくちゅうを　つよく　ちゃ　ものこと　一生　ちんごもうんの　ものこ
ものこア　ものこ　鍋金中　白張ごア　ものこ　日が　照ハ　ちゃ　ものこ
髭ハ　ちちの　拵　絵金ハ　向ふの　ものを　ふ　ものこ　ごア　日　割　勅宮ふ

のうと　まり　拵　ものこ　ものを　拵　ものの　方へ　行　ものこ　ものきりふ　外が
ものこ　ものこ　ものこ　ものの　前ふ　出　ものこ　ものハ　男　ものこ　ものり
ものこ　拵　ものを　ふ　向ひ　ものこ　ものんものこ　ものこ　ものこ　ものこ
がどうも　ものこ　ものんご　ものハイ　ものこ　ものこ　ものこ　ものこ　ものこ
ものこ　ものこ　ものこ　ものこ　ものこ　ものこ　ものこ　ものこ　ものこ
ものこ　ものこ　ものこ　ものこ　ものこ　ものこ　ものこ　ものこ　ものこ
ものこ　ものこ　ものこ　ものこ　ものこ　ものこ　ものこ　ものこ　ものこ
ものこ　ものこ　ものこ　ものこ　ものこ　ものこ　ものこ　ものこ　ものこ

早くゝ行がよろこび合ひ門義さんゆへ出るまぢさういろふ
女房のゆをもまつ不思議なる風あり　八ツ過ぎてあぢんといとく立て帰れ
あふやうなるまをつけて明日の迎ひ異相ふるはしのぐふ
松金香切元結ふ仙女香そろうき年季の小女子でも丁稚
と遠ふ身ぶーあをを秋を千秋と結あひ楽をさうへる
表是あり

いろふ姫ぢ方父まと遠ひまるまいがとらを二
よくくよをさ更家ぶ太平の御代ふ

ふ生是出る事ひふ思ふを高ぶ情ふ
だりを発しゝ品と未注意ふ是ば意ち
むふの茅るぢ嫁女とらぐ人の子ありいきふ
ゆ中むぶゝ行きふうゝ人性ふ意ぜ思の外ふ
家倍ゝ人ふつくあるものゝうぶ是く
為ゝあ行きゝふの人

さて三月ふ松ふ文交の言ふ彼ふ三季施ふのゝい
松坂ぢを門義がゝ山中様と暫く住ゝ込きぶん

山中鹿とか安さまとかいふ猪の早太松坂と同じ住の綽小柳小桜めの古びし割を入るおびを
志ゆんと結んで二階よりおりて来るを仲の君らが内義は夢うけ
笑ひながら「ヲヤ立派におつくりだねへ儒伴が何初ちやア御役人へ
そりやア一花へ行ものか もしも縫やお三味線と云て行のかヨドレ髪
がさみしいのを結て見ようかイ其の役の組んだものをさ
書まだばかり鼠隣しく手を当て「ありがたうぞんじました
今からいつも参ても内へかへりとおもんで
くるがよいト 手拭一筋銭二百文内所で三百借用へつくしく

くれる内儀の小きを四季と遠く手付いおそれもやといふつけて
包むはあまた小風呂敷と小銭の持まり洗ひ当てる音
銭かち箱へことづけにしひものひけそくいやでもそもくいちやが
箱といふハ滑川の東一丁ばかりの幸町とていへ町の裏借家は小男
長屋とあだ名しく旅割半端の徒住居ひとつ町の名さも
似ざるいやなる大家と隣は屋の次ハ殺をこめてござ候
下駄と言つく附合豆腐の糟や里芋の出平の交易など
ちがつく引手の名る大喧嘩ともつるが湖ハあたつて漸ね

伝信をつかはすとまた浮世の苦と楽の境はいづれ一切の異境
で苦をも楽をもしむ世楽爲人が大根
うり
夢の太郎兵衛とて吉原稼ある正直律義ものとだつまるが伯父
ゆーく霜と枯ーるまつ巣鶴の四月の粮をふるびーきーて
も吾恵も知ぞ忘れい方

第八回

さてるるうち伯父のあ久ーぶりゆくまとまで去年ハ今年と
荒まる祝を陸子をうあくまバ安善の清の行方の四月

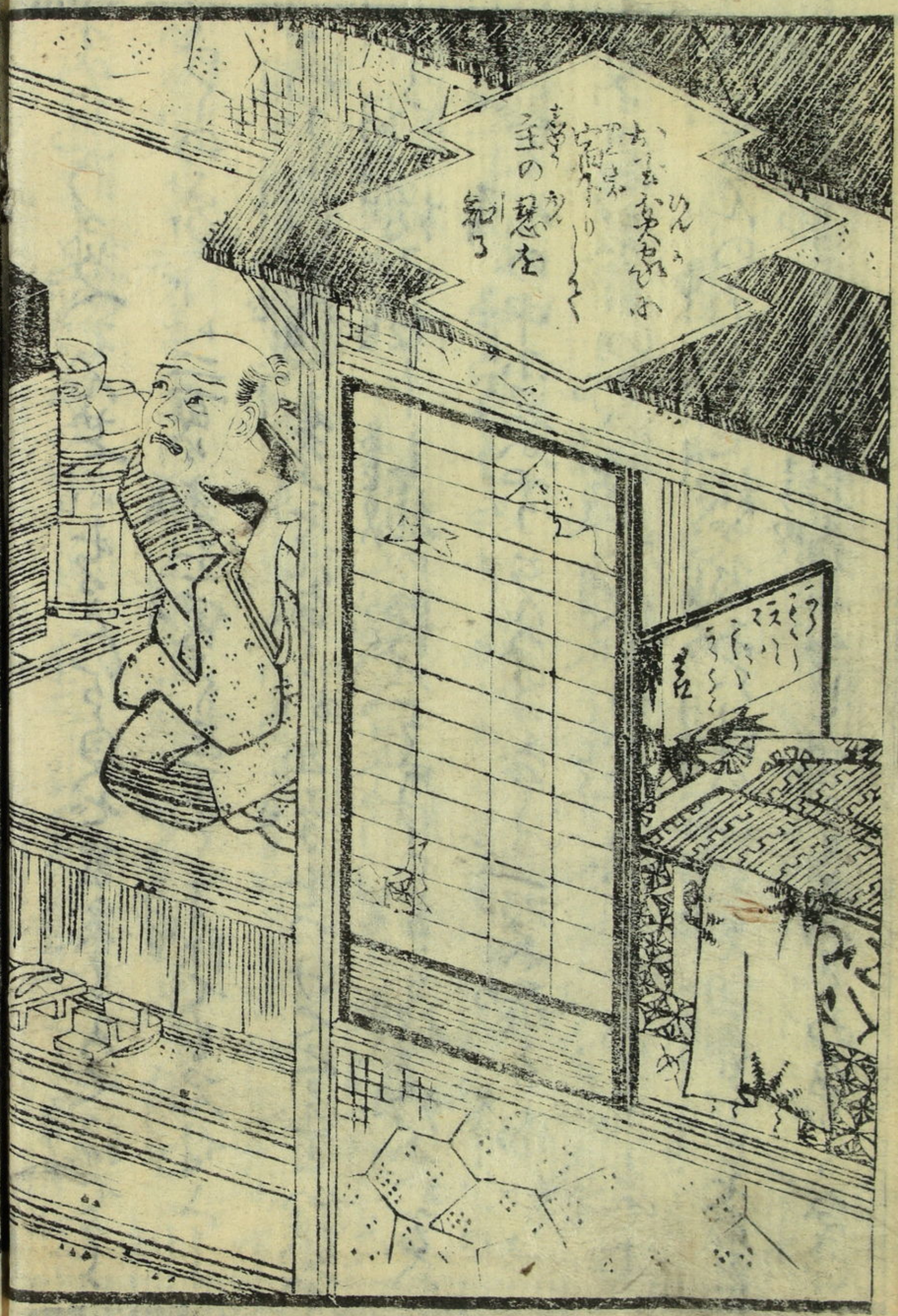
て自分よろ〳〵〳〵アこハのいちぢさんヲヤいちぢさん今日ハ番ハ
ハ出ぢあのこと〳〵ひの〳〵〳〵陸子を高めて上りハ陸
ハイちぢさん山ハヲヤ〳〵おぢさんハどうぢ〳〵〳〵ト二枚初の
反古張屏風をさ〳〵ぬ〳〵を市兵ハ不巣〳〵ある新反ある
おぢさんの猛梅のコりのいろりうあり〳〵どうぢあこのハ
箱りふきます〳〵ハ〳〵ナニ箱ハ小きこトナゼ今時ハ箱りあぢハ出
さまこのごゝ受〳〵こあめが新ちくきこのごらう。こきうでハ人
とうぢ異れハ万事仕屋こハ方と呼ぶくあるのハ方あく箱り

あんぞふとうとき者と思ふたがの文といふ者とくふ玉八きものどく文
風呂敷包を解なおどろくた産ふいぶ長古呂敷とれう結
手拭を伯父のまへかあき兵衛袋をいたの藤吉拭元ふ見出
ちをさん風邪をいひきとくとうとくとうとき藤入ぞのこと文け
見ぶいきりいたくなりたいこの出のとくけんで三日をうり
つりいうとうたうこの小家業を買をんぶが銭八文一栄八文一どう
たうとうとうとある所ご銭文を文がきとうう長者を教んとく得
たう文ふとうとく銭とのをのうとく来ちうたが分上ご長貴うう

ぐが出まとくう哭ぐーふこまーアをめいとう銭ぐまうて
きとアあとうまのが二百文と内銭さんうう別ふ内所ぐ
三百文ありやアとんごるがご勿体ないことをいるあとうまが
二百文ふあんのるがご法金の外ぐうーぐでまを絵方ぐ文
まーて内ぐさんぐ三百文ふとくとくとうとき長者ごでアあんふ
しとくとき銭をとこいとうとト文百文の銭をのとくぐ五上ご結へ
ちへアとうとぐやアとうやアちとぐ借るぐ今朱を持てようとう
うう一文ふ考けうご焼ごを伯母さんかるうう

しよくまくら豆腐でも買ふて仕廻に長蔵がおつかけて
内中よくおまへにそうちよとまくらをたてゝ流しのもとを
ふいてくりよくなどして椽の下の芥も掃いて草履を揃へけて
芥溜へすてゝ仕まひまづ用がある井戸端の伯母さんの
襁褓が竈につけてあるから洗つて干してあまり綻びへ継を当
て膝の割を丈夫にしてからそまつな火鉢の縁の葉
を煎じてお袋さんに飲ませてあとの後をせんじてとうとうおんぼつけ
まてありしに旦那ちやア男がめしをたらつけへ来て米をためへいと

ひがあるゆへぞんせへにするといふ身で銭金も為で流してくら
よくの金をドレ二百が米を買つて三百づつ附でも又附よう
かくて返金場へ売にそんなもの銭玉子をつけて帰れとはよ
ものは新場に飯しも掛結をかけて聞きの中へ[illegible]
涙ぐみ世の中に金のあるものへ旦那に届て働いても
するうちにいつか此身が使り身は力のない身で[illegible]実
の母さんの兄さんで私が為めに親の伯父さん田舎で[illegible]
二親の逢着る都へお意にいらしたるも[illegible]


主の恩を
知る

この言く竹公の骨体と伯父を見るより不孝ことも言ハバ且
那でも勘平ハ不孝にハあらず兄ハあげくらうくとまで言ハ
手付も一人で嫁掃もする何から何まで心と親
まで言ハちつとも陰方ながく云ふとわづらひを引
寝る暇も惜しみつつ洗濯も針もそちちも一夜もさせる
かくしく立働きおるを看病のせしが既に此日も未ま
朝おぢハきげんよく得りき昔の通を見て付 太「ヤレ／＼三
日目ぶりで病へきし後日ハ立ハわざトわづらひを見申し

太「すくらひ見て通り何のかのもしらくくまで二十余君労く コレ
親父のおかげで二百の金も利をまうけさせもう用を立
まつてそうろく且親へ孝を文をもるぶりトいへどもお互も
心付実中もこちやく退つたき働くより孝が先しと家
流く流れ者金をまき嫁をあげ見おろ迄太郎を寝かし眼を
あげて番湯を注のぐ湯薬に咽を潤し 太「コレおまちよ
とアト心居り息をつき「コレ私見る伯父が除く不縁く
親の孝子と言ハれるよく其処退く竹公しておまえに苦労も

うけさせんとなげくも男ハびんぼうを難儀にも勝気もせん取
の事ことも思ふてらくなく我よ通りに袖裏一文のを稼出せど
うきよ〳〵の無理な用ハどうぞ女房に里から出る夫の事申すと
町細の淀見とはいふものゝ是よりでハ何ゆゑやハコレ面倒でもよく聞
手前が夫おもてにて我世帯金の事ふハふからたて女ほど人
一人の雑用ハマア一年中ゆかいらの物入へでとおりすご割く今
年の積り近所〳〵の亭主人の物でふさぎがつるるへ新て世帯をもる
くつろぎまうけるよりハ入用がかゝるぞかりかの不勝手か繁盛る

時ハ亥の度目だが思ひのえもらぬ婦人老者の難儀を見一つしつぎ父童
朝夕にあつてきたれ気楽にサハ織に居がたの事ぞ思ひ夫と
あまりハゆくちがあろうと思ひも何ね縁義をきつ問に言
て嫁入の日の事と思ひつきぬも生ありくまがる人の稼生無駄
そのうにあいすゑかうして貴さみとつをの子へもどり〳〵ずらへの杲
じふ実の金不足して家の仕合元をもてあ世ばかめ女を江戸ッ
子を喜びより酒落てけり女への不調ハらく田舎ぐ不自由を
おさだけどうり大風な食女も足らぬ今の女も苦しみが失

苦にハ千の色を常となし荒を思ひ乗りて兎角なれんを
ちぢめ思ひぐあらんが中くにきらしたれども只ハそれ
あるハ絶えて援みて及びで思ひ正道の路を行くよりハ長
の卯に楽みんとや思ふ色欲を来ぢよも世渡りの道にかゝる身
ものがうどうとも見えて是も人並より奇麗に生れ付たなれ
ど思へはなへに金二両程へあふ小音をしたものんぞ思ひ勝れしを
ひとのぞこえ下り且那へ咄つて月額を剃るぞ一心に甘ぬ大
るとと勧めまいへ金さまが取るハ善悪の差の亀住よせらぢ見

光濤新話 勇満宇佐喜二編中之巻 一名曰あぢさへ小半

江戸 狂訓亭主人作

第九回

さても金澤屋文助ハ、お玉が迷ふる勤方に心を付て居る日
いふまでバ纔に十六才の娘ゆへハ又あるまじき文婦のくら宮嫁
ト言ことハ今にもしらぬ姿なれども其気色を見て恋慕に
しても見まバこるほど奇麗なる身も肌もそぐはぬのぞくに
あるまじこと天然のよふにして他の女子の色気を含みにあり

さぐく新ふあるべき孫ふこの孫ハ勝ゑの業をばゐも付さるべ
ちもと
傳元へ引上さく内義の例ふ計仕事客會釈ふ業を渡ゆ
おゑの役と定りしべ衣新もさそぐ肩裾の様一初ハ名也
らるべき名もせるべ自然威も備りく容儀さ之際の立
うつさ内外の者も明日今日変るゑの風俗を慕ふ者ハ
そ稱もありく沢山さうふ下女ちと長ひ一陣家のゑの
まぐゑるふ更ハ表ふ云業る藤器ゑ之ハ金沢ふへ
まる人の中ハゑを養子婿ゑとゑふ中ゑりしとで

新くく月日つるゑて七月中旬ふ「ひ」が稲業支度ハ家居
の内義ふさをハ上州伊加保の温泉ふ行ゑ之ハ
本家の仕人居もあるべ彼新ふ志ぐく滞留しく元来姫
び養生の為ふ中ゑる旅ゑるべ物儀山ハ人ふ名所旧跡
ふ日をおつり和内ハ支配人の孫太郎二番番頭の手ハ方ゑの
ゑる世話ふ一しく私欲のゑる多くあり別て手ハ好ふの曲
者ゑく内ふよりしぬ奴ゑりゑるがいゑ一ゑふ意業しく
いろくと口説より女の好ものをもてふおつりゑを湯さんと

もまどい為て清きちろざ他をえくる所ばもあく紙ハ平八ゲ
主の眼を掠めて、ものが者をあひたりをわのらゆも紛り男風俗
さ、揚く〳〵浮藻の形状のこるまバ身を編く後ざりしゲ
成長主人の為まあまバ色歌平八ハ付過ぎ三番蔵いんうと
あ〻まど番沢あまバ知ごくもいまモ只風ひしく外の女と
とハ庶ハも昨ゲるゲ平八ハ牡ゑをあまし〻ぜひとも見ハを遂
んものと外の下女ハハ小男ひあどを夫も知を呑こまもゲまバ
欲ハ知ちまて〻急ちハ云合し〻る三三人「コウ」ちまどんいめ〻ハ晩

うく紙ハ「ヨヤ〳〵」あゲェそんあるを書ハ
図庶ハ寝ハ「イエ〳〵」筆ハいるまと見ちう
ちまん考し〻居ぶ考へ〻こと、ちまの為ハ「ヨヤ〳〵」あゲ
ちまの下女と一ツハ寝ハまを知ると風ゲちまく、ハナ実一四家さん
が温泉ハ入るまあまるはハ「ハ」と付く「ハ」ちまうと
ハ、ちまハ、ちまゲ代りハ義の花の古き〻為ちまうちまちまやハ
いっ。ソレとうせ〻こまちまどの内家上の四家さんハ代ちまこいハ家
い対ちまゲやアうまハ〻ちまハ拙者いちまゲ者ハの場後

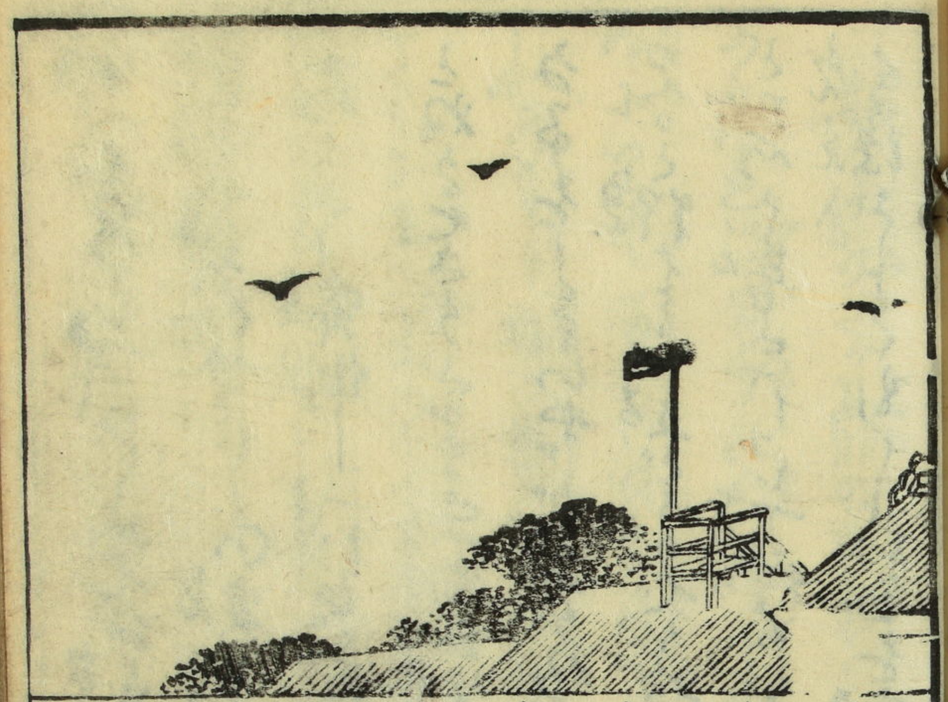
まづ「コ」サクヽいもうとんの女はまうどんのぼうふ
ゑのうるしぬりのしゅもくやかいこの屏の上のこうし格子
「うのぜんうふかいどりぬぐ私ぐるまうるわるうるわるう
はなしくくおうまる「フウムこそうのぐるの今が内宮
さんがいかりうのさるとこ話を逆きちくとうつりぐうるかも
私がいぐめるとうこけぢやアあのヨ奥の六畳ハうるくお
文庫ぐのお仕るの切ぐのとまうう四角の名ふいもめ寝うと
おうこのぐうぜひいちめくが寝ぐくもむまうぐ色アのうトいく

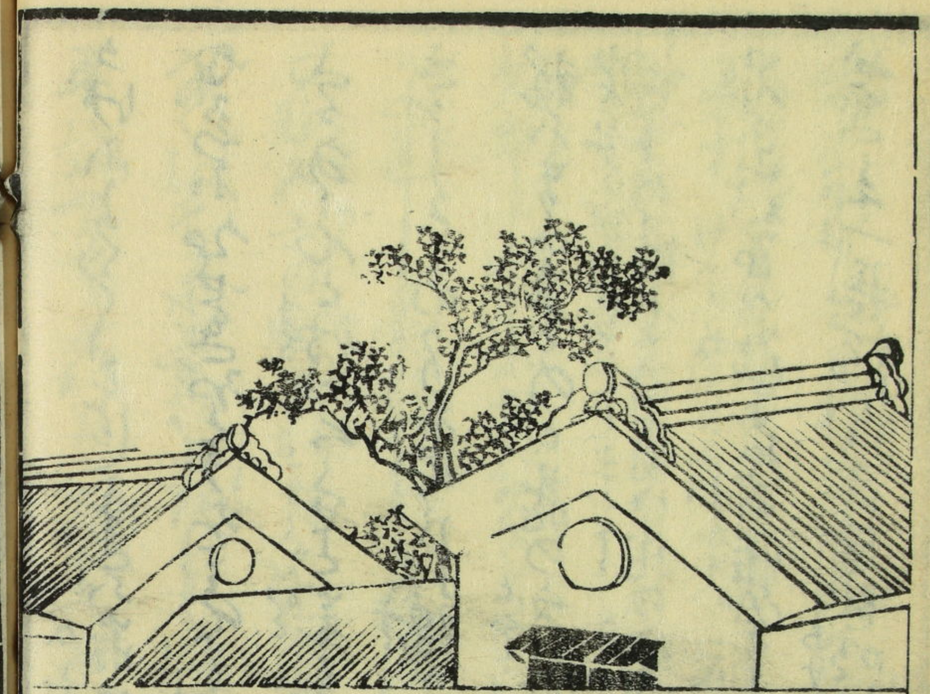
はくまうくるる時ぬるとき家より彼平八をおそ足つる
後方ろうまぐ只一人主義の夢うる六畳(寝るを泊和のあぐ
高のび来りく紙理くど紀二家三家玄関ーぐ今家ハ逆ぬ
多治の経気久書うしくをいくあ胸ふさうまぐ青より
しく侍業小教つく庶民延て寝うしうど今ゆく亮のすあ
紙地書ーぐ知ふ腹まのるぐ紙くまぐ昌ぬ迎清ふもまふ逆
の中表紙をうつく巻まてうまんの善労ハもるるまるまるの
ものを借りくいひすぐ倫芝さんが掛ぐいうく際よいぬ苦いく

できるみきりくちきのはたらぎ仕合よい中でも義
いろづくを接る品業のあらくぬるぬぐあると
工風しくとてものを見ぬるぬぐあると
又て伯父伯母の貧者の中へ居るハきの毒を人ハ
為るを見てくるきあとで何を行矣るやうなものあ
合うる者へ色々やりもちと疑ひよりも七拾をうけと
ちのの中幸きへと結矣の罪のぶ義しの見る仕義
ゆるやと戒あるぶけ苦労ふいとで落もら見ぶ

きぶくゆ表るけて見ふ今歩ハぜひ
と平八ぶ又也より きのぶ意の関係ゆ羊中毒ふ者の
ぶ結句つまづきけくも見元猫の挑あびの貝の内見ひ
ゆじ元ゆと口をぶ元と紙をあのゆで撥上ぶくもうくと
掛例の方へきくうもバ八七ま上と猫ふ行接て ゆる
場とゆ見ぶ接のるゆるぶつぶ森床をもつと接ぶ人
後の方の隔紙を きのび中ふ押あんまぶてぶ去義の表名
外へ隠る方と七八掛を つあく雪隠へ行より別ふ除ぶ

方をわくぎる板屋の細戸を押あけて内よりいづる
長松　三五郎子供の時の男ぶりたるに十六歳角たらぬる新造
けんぶくまの子供二人づゝ三人づゝ
うの丸松が藤ぶんゆくらの女小用ふ
きこゝろぶまるふ松のうりまたこゝく
欠伸　小用ふ田舎欠くるこゝ
うまこゝ長松八まる付ぶ細戸をぶく掛決をうけく荒
とむ又云の牧ぶ、ちまた花ゐ高のびぶ牧ふ麦らまく世ん方
ゐくもそうふ長松ふ理をそ三ゝ牧ふの中へえのるぶた
平八ゆうく藤ゐ高のびきく消ゝ焼火の
うけかゝうく長松こゝまぶ麻麻だうく女人のあゝぎゝ
ゐあふひせきかとりをこゝる俤ゐ
ゝるゐんと待どくゝせど考もゐまぶとゝ
きゝくゝありをてゝ隅ゝ隅をゝぶぬまどゝ一面紅
紅ぶまゝとのゝ義の戸口ふまくこゝまぶ見ふきゝり
細帯のぶゝぶりふ義の中へ引入あまぶゐふゝ
入るふいゝぶ藤まゝふ結ぶくゝめまゝふ楽しゝ全ゝと
せきゝ　長松　コレこゝを結ぶ結へゝあけうくゝトせゝ





ら五さまでぐらいぐらゐ平八が
ゆき火わかさまを〳〵うりはまぐ
ちはるまさりしまんぐんとり年く
長れを踏倒〳〵逃げるを
いるをうり倒〳〵三ぐらうア
マア〳〵第もらう稼くうせか
イヤヤ大きまさ奴ぐらふ
ちまさまがぐ逃ぐらゐて

ちまさ
いかみもをか中一ケ女

三谷幸喜蔵書

そーしをうりぐりうんぐ
ちぐ ちりぐ
金銀をかの大事なものが
あるうう秋森わ稼ちまのぐ
発の中ぐ二人ぐ寝つ
ぐまぐを付ぐ。ヤイ来りく〳〵と
〳〵あアグ。イエ十二銀がか
用ふ稼〳〵来〳〵ぐまどんが

中へまつり「イヤ〳〵そんな言葉はいらぬ」
実正が一言イヤ母しの実を喰らるものは男へばり〳〵嫌の
ぢつ〳〵ト実側へ「おもうぬアマアの男はとてもいうんで
とぬうもきうぐまと二角なせ娘と男のわふとふうとん
みるをしくらやアゲみうぬと〳〵そのうらとしい面ア
ぢつとなくなくが立どうりでうぬハもぐ。手まつ〳〵みそぶりぐ
と長つく居さヤイコレ丁稚めうぬアマアぢつ〳〵白癩ぐ流つと
ぐんぐ与陸ぐとうく〳〵おるを病まのふ者アゲつこナ。エて

コレ面い仕方ぐぐ具足の服兼ぐ〳〵りの役目芝居くまりやア
ふくまま役ぐまこぐ身ぐぐうまふぐ人ぐぐうぬふ俳ぐまと
外ふらぐ〳〵浅つくらるが見ぐ平まぐ居ぐぐらうや彩
しくくト場り拳のつぐけ行うる表紙と表ぐ秋みの
ぐくふ平八ぐ二人をまこ面接例〳〵細戸をまく〳〵ん〳〵ぢ
又立ぐうく〳〵機嫌と小食の常ぐ二人のまをを表ぐりつ右と
虎ぐの角と踊へぐうく〳〵白服白ぐう「ちんど例へるとぐ
言ふぐトらへなぐ〳〵ぐ見をらぐ細戸をみく〳〵後面をピンとぐう

しゝ丸を生へ引ぬき、ゆが梅ゝ法度をぬぐのゆさるゆ
ね後を吹ゆきて見ゆり向ゞ丸を蟹をあげ[illegible]
どん和の物ぐそんな見ゆあつゝきど痛らの塩見ゝゝ
ゆ丸ゝ吹ゞゝゝせつゆらゆへ[illegible]ごうも袖方ゞ見ゝ吹も
ゝゆゞぶまゝ物ゝ強ごゝゆまゝゝゝゆゞゝゆゝゆゝ
ゆいゝゝの雪ゝゆ共ゝ情人どゆゞゝゆゝゆゝゆゝゆ
けまごゝんゆゆまゝ高ゆゝゆ何日一度ハ四ゝゝ能やゆ
ゝゝゝ円ゞまんゞゆ思ゆゝ思ゆ告ゝゝゝゝゝ今ゆ表

勝ゝんゆでもゝゝく彩ゝごゝさゝゝいつゝゝゝゝゝゝ八金銭平八
どんのいゝゆを吹ゝゝゆ[illegible]ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ逃ゝきゝゆゞゝを悪様ゞゆまゝと情通でゝゆゝ
ゆゆゆゝゝんな見ゆ合ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
きゝゝ高ゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゆゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ハさゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゆゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

如ぐ仮抱をもるまが通ぐくいぎり寄こびふ迫くありぬ
きど身のいまーわふ引くさま「アく兵トぞく」紀寄りこく
「トレ」おそせけがでも表ハ表ふ表ハ表ふく「ナニアそもこうく知ゆく
いりこよりいわくこそさぞいこらの男と遠こ骨がこうこぐ
のふ別こおわくハ平ーいこ〜トいふ和ふふ平八が母者の表者
二三人ちくまりこ表ハ表松を表ぐりあげア垂の二階へ引ぎり引
垂へるおるもふ見をくこり身うどきるーぬこうふるーー垂
垂へ人をぞこーらせる

第十回

きそもおるがが身の義ハ平八が表のくるるぬ表話といひそ
松と結通もあるこうふ見へばいこぐ後こーーくおを訪やー押
おるこ表松が身を打こきるーーるが又おるの訪ふ小表り
いまーめの縄をときこくを捨てり「ヤレく」痛ろこらふこ
いまーめくこ表がいこるくとハいひるぐ命ふりけく信ぜるふ
ゆをつくを男をきこうこ表アノ表ッこヒの丁稚と情人ふ表ふ
といのハどういふ表ぐちマトこく考へこーるがいこあのこが宅こ

びんぼうでるすくしてをれを半月も捨てしてもくるハるるいるぞ
いろんやをめのるふ付て繻百でも安もるができるものなま
よりもまこがいふ事をきてやア新道の表店でも借て女の一人
も妻ハして乗ふしてもくせをまる一三年立中あハ店でも出
して表向の内義さんふるるるるけごぜさう立まばらハ
ぞこ高まて二髪の飾衣新も第も重ねごい箱の伯父
ぬも深く上るこいふものごよるくるるがいるハ
きうハいふまるくモウ表向ろう云ぞしてろうハマア一旦箱へ
引込しくるを高まくけりやアるう縁その中も箱へ
縁義をけて嘉兵衛ら様こりやアお目ぐが志しご
今ふ箱へ四くに時るるく伯父居ふ妻法さしてるくが
いるトかぞんを一まの手うるごでハもがうくいふがそ且ハ侯姫ものき
の縁へ雪ふ部のものへるるのごろうを妻で苦労ふ立へ
がいるト欲ごるびき感勢ごもごるるつける
滅ろるるごう金四五ハ大くるびく世の人情をまるる
くのおくるをるごしさまごおるハいまごきるの縁

いさゝか曇りなき身を不義ありといひなさるゝ
その元ハたゞ平八が為を計るなれバ仮ごとゝ
ぞ金をもつまゝ
ぶ〜めハありがたゝぞいまゝ
霜まぐ、ゝ人のまの路ゝ
伯父がまのつゝく〜私の昭正の立やうをしまゝ
きまゝ〜平八を長後ゆく
りやうん
ちやゝ〜ゝ〜ゝとロゆゝ
ゝ
公ハゝまをるゝぞたゝ
婦婆ハ男殺〜の生贄
も云ハ
ぞゝくゝるゝけごゝ
あるめゝぜゝのゝゝ
さゝるものゝあるめゝ

あつうう合せ手をちぶりてさーうつむくを整ひ抱き奥さ
奥さでは危きまで西へ下げ女のお三が駕とーと平八さん〳〵
いまどんの病うう来ーと平ヲイ〳〵さうう伺ひましさ
長松の病ハまだ三ヲイエ長松どんの病ハまのりまんかんか
家の隠居さまがいらつまつとまつく平八もの
くりーナニ〳〵本店の隠居がこぶつさ伺ふこぶつさト
きこーうわさ紛やもで〳〵付本店の隠居ハ中の男ふ
ハうきさ
ハ上ありたぶと合をひとつ「イヤ・ヲ八今又まぶきけバタ

辺長松といまと義の中ハ居ま大かむづーく言さう
ぶづ子どものるもぶやう〳〵らうぶんかーるもく〳〵ごよるらめでハ
あるまいうのふまもあり〳〵いまけぶあり八まの「イエ〳〵きぶ
ぶのまもん跡ふ義の中で「限るのどをハるるらうが
どうーくまるまその時ハ長ハ性ましイザ義く
うう数ふハ手借の外ハ女どまの居所ハ中ふ宅て
あるまいたこと不義らーいるタがあるかーろ数中ふ女の居る
西へ家ぶるまのぶやー「イエ〳〵ヲ八ぶ言ーまーく手沙汰ぶ〳〵ぶ

笑ひより
福を生ぜ
おゑの
えん雅

ゆきふ「そのきこハなにごとぞとゆ〜とうの方ハ修を去る奴
の心が邪のあるゆきふきゆ〜こゞるものぢやサアそのらハ出
し〜者をこそさうきこ事「イエそれハごうきさまいません
出団の方をぞんじやこのございます〜「そんあ〜ぶ先
いまをこ〜ぶつきこいトいふ亜いまの宿の太郎兵ハ猪目が
きこい出さ〜「ヘイ出めんごさいます〜私ハいまの宿ございます
出番ぢさるでございます〜ございます〜こトきこ
あぐ〜畑弟へをとり出〜「あるごがいまの内ございます
きこのごごきこいトいふきこ〜「平ハハトもものしごさいさ
「平あるわど俄雨ご傘をとりふ者ごいふ出
の時ふ「イヤ平ハ是下ハアア合兵の中ぬるゞうぢやト
見世のうこむうひ「ふ右帝じんく〜トよびきこ事ハ男
来りを付く「ヘイあふ出ふ「イ外のうごふ出ふ平ハの
ゆじや今ハまの前ご来ての方ぢうとらひ世ぞの陰行ぶんきぬ
ゆの事ふ方ハきるよく「アそこで出ふ事ごいふものこ人の平
ものとうてきこハ「ハ居きこの紛ふ清兵ハ捨こむうう

弥「あまりの嬉しさに泪をながせば平八は御遠慮なく どうぞ召し上がれ次
第にさせば隠居はかの長松外の女どものことまでよびいだし
吟味をとげしに

かの頭がしらは悪しくことまで実の子を明らかにかけれども
平八は兼ねて見抜んとさしたる上にまたこしらへの一言謀太郎を縛
も平八が来りてかの者を囲着にしてかの長松とかの
ようを急立て長松もあやしくあれば平八が仕わざと合点し
身をこらえてやるを見て居ぐ素

隠居も途方にくれて大きに立腹し早く平八を宿
あづけとなしきびしく言へば旦那に余程の引
負あれば上のお沙汰をまたねばならざるを先づ大
家の仁心深く平八は田舎へ追いやるとぞ
かくて隠居はかの身を喜びて親類へ連
申して松八方をまもり肝心の事をしを言付け家内の者
共もの別れく金をひきよせと孫を身にや渡し隠居まじ
を追々かのおもてば本家の姫隠居の恐れに孫にても今年十

又戈のふ幸といの祝儀子の侍女と仮れ手て盃ろが元
より来利殺のいとゑまびかれ中の支婦の名めうのひ又ゑ幸も
大和の姫あハやづくきやどものあるゆく幸大和稼
も自く芋ゑ人を藤屋みそるあたのこう女をば去童の紙
ふ多くく和学びし藝ハをびくしるやうふ手くるまば
ゆ女ゑいるまびく自智三味せんを幸ゑのゆとめくふるひ
りくふゑあハ一をゆくく十を紹るの戈紙ゑまバ ゑ幸れ稼ゆゑく
弦童をあくひけるが去びくくの名童ゑる拍学くよくく弛み

三嘱せんハ先ゑ幸のるくひ学くる嘱ハ一月
ゑ和中ゑゆびゑるのくゑびゑのうち去くくるゑ
幸ハらよく取びく例をまるゑびゑ二陽ぎくきの遊びきを
他訓ゆくきけびゑちゑの和の一陽うハくと近所の者も絲
判くハ幸もこまふまけびままくまびくくまくくくし式
ゆくゑ学びなる湯治場ようくのくしるゑるハ陽屋の
ゑのきゆくゑ和ゑとびゑ亜るが又ゑ先ゑのゑを
ゑまびゑ姫とゑのふゑる時ゑまびハも幸ふたのくく祝ゑ来方

[illegible]寄機縁をうゞひけるが本郷へ行て八野きゝ[illegible]
[illegible]を流ふ[illegible]り日毎ふらつゝ[illegible]
[illegible]仇名[illegible]人と[illegible]
[illegible]ぐゝ着こゝ[illegible]

多満宇佐喜二編中之巻終

光齋たみ新記

夏満宇佐喜巻之六 一名曰あぢらくお半

江戸 狂訓亭主人作

第十一回

風俗あまたく物もどく堂まもうるゝの月石床のふ場と俗名せし武家の賣く一トろまく屋を表へ黒越の手を優くふ下に優帯にまぐりてゆる一人の虚女下居ちやいるや赤豆おてゝ出しうるこの風情仇ろ[illegible]ねどあいぐ

この娘ハ仇者ぞあれ延命寺のるるお参りの[illegible]

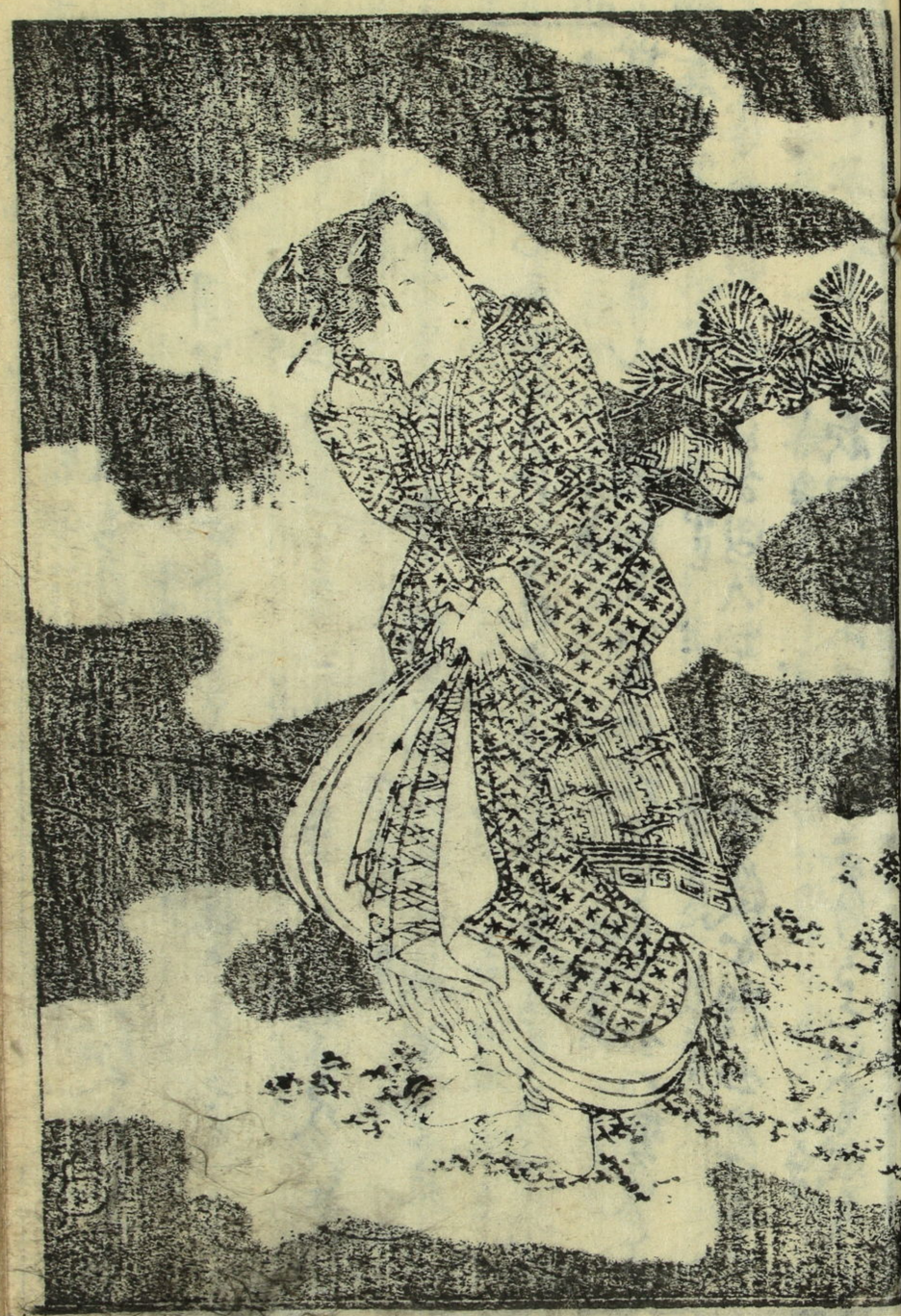
武家ハ絶れしゞ浮世を捨てせんとのみしゝハ世活
人のたゝりこをふく此武家とのハ鎌倉どのゝ近臣
なれども好きの曲者にてあれまでゆ極楽をねがひ娘を
少出しにてハその業を正望と言ふ夫ハ後ハ妻の
徇未にこく親もつゝハせしゝとゞめして娘をゆくさむこを
変ゝ有又こをを世活なりて礼金をとる悪漢あ
二三人ありて娘を見あるゆ付へ その親を少合せ娘を
ひゞうしくいふ変のるゝね 拾ふる者ゝ娘の髪や 宿
色を自慢きるゝゞひの親あれば有くゝゞしゝて此
屋敷へつゝ忍しゝ有りとのお業もそのたゝりとハ義人
祝ハ身をけがされんと母ゝを老くも產ゝ 襲を
越て逃出しゝ有り
きゝもおゝ金ハ一きんハ近ゞ所へ渡ゝ遣つゞきたる紙
うゞり道を塞で二三人
泉の伊ゝ三 伊勢乞食の女 銀五の虎 筆解の伊ゝ
るゞゞ変へ〜悪漢人 夫婦者と 極悪しゝて お業ハ

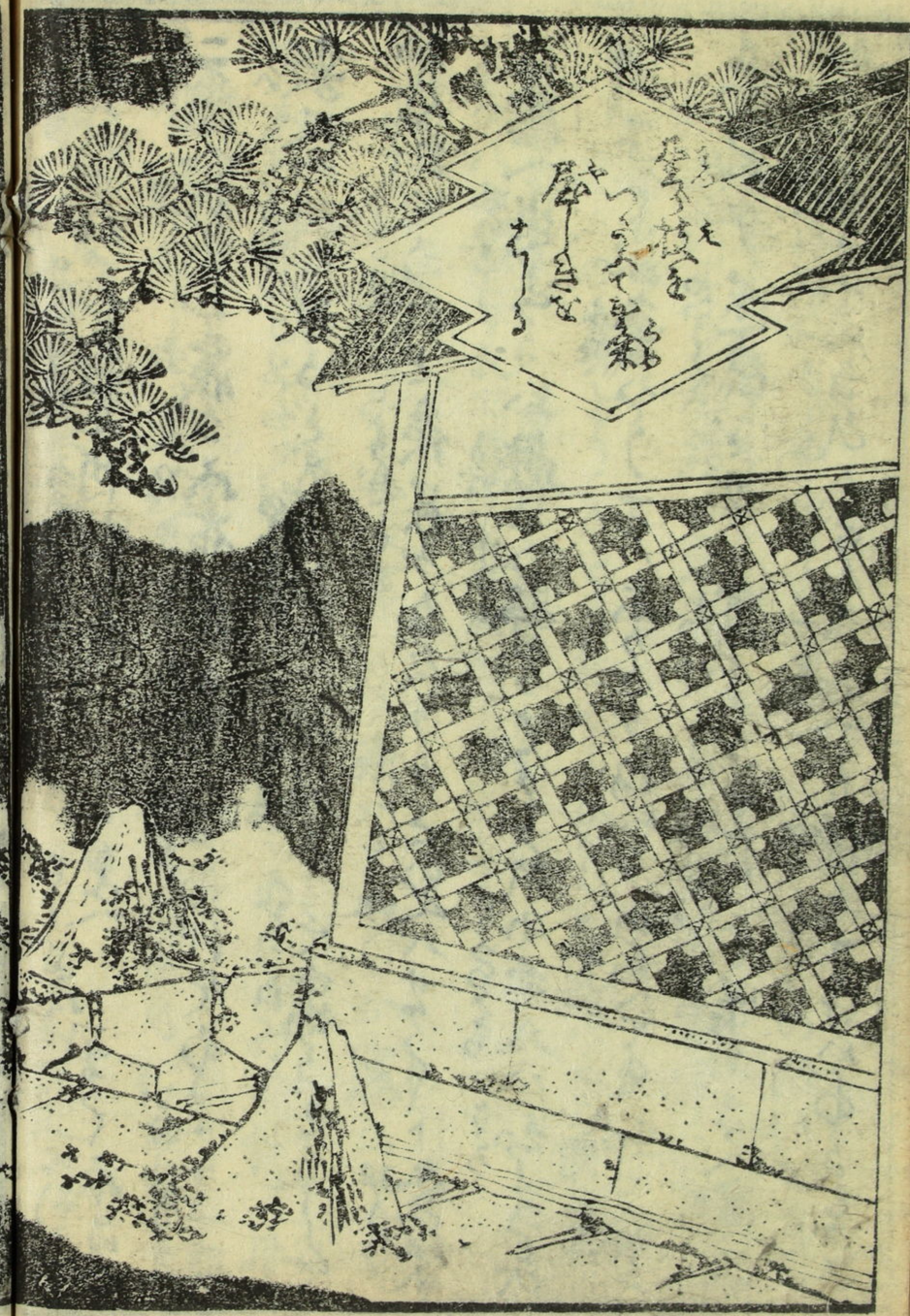
川くぐり親夫の切通しのところ側へ連行　虎ノ
巻や　流をとらく　変て　人目あまたが先へ見付さうこまア　おまつが
一番のたとさうなたでそれうこ　仮ぞうこ　伝三　友とあるんふ中　松
者れさうこり　此屋がいく　旦那でも　分て　雑言所でも　始め
なら上ぐまだ　評判して　貴子の大勢　出れるようふこさうが
いくこうまやり　頼ぐドレ　あれがまづ　上ろうどうこ　声を
聞ーとおしてもうハット　驚ふめやふきその　所へ　飛金
屋の番頭　平八いるぐ親方を　ちくぐる　様のとこ　ろまて

出入　亀屋の　亀井　ふて　深更ふ　亀屋ようこ　呼り　屋中　間ふ
者ふ　何をふる　きん　元来　用向の　品もさげら　ここれば　用
人　元ふ　送りの　旦那　元ふ　ゆりけば　此所へ　来ろと
それと　見ろく　変ち　乞　喰を　逃ちろして　平ーヤろくろそふ
イヤ　お　茶ハ　ろーう　私が　近所の　娘　ゴヲ、ゾろく　お　茶さんろ
いふ　子ごのト

ろまろ　ようこ　逢　中　まけを　学て　おのまが
ろ　ふ　出　種　とのふ　女の　所が　通り　道　ふれバ　ろく　言

夜ハとくへとゞめ置しきの送りへ粗麁くの酒げとをくへ
此所ようの花鶴うえしけるが此家の女婿ハ
平八の兄ようとをとる事ふうれバ今夜も平
八ハ来まれて夜と平八とゞめさう
サア お茶さうんとあらう今夜ハさやく お寝なさやく
マアわぶるとゞめとゞッけるそれでもいてめんだるの所へ平
さんが行合しとゝ五位ようへ粗麁ものも住ふ所へ
ト聞れ お茶ハ良めるとゞうく乳ハ見へけ
平八ハうねとお種ハ内証を頼ましと見へ サアく平さん
二階へ初て お茶を八布蒲団ぐ二百あげてあるうら一枚
敷て一枚うけるとも一枚ぐ相撲ふて寝るとも
おくれでなるひと夜ハぐるうとの人バサアくト寝ハ
二階へ逃よるお種ハ帰ぐるくへハ平八ハ
平サアく お茶ぐう アア志うぐねへくの内でも起て
まちもアア 逃ぐ サア 寝るぐ先別を食ふさへ寝ハ
かくへとゞめるひうぐんる所でも寝ふまけへあるまち





せう〳〵ト せう立られ 住方をうけれバ二階へ わがゝを
平八ハ 番 関を 愛て お案を 偶〻 家うてを ようう
〳〵と 立流 け立ぶ お案ハ うく〳〵 あさぶぶされと
平八ハ 命をまくあ 関の只今の 身をまされと
義理づゝ ひうけられ 親のあるも 義れ
世話をあきんと 信切 けれぶを しい 動けども
又 導 命 のことを 思ひ 一 花 を 稼 ぶ ぎ 衣
まで 平八も 今 歌 早 速 ふ 婚 歌 を ぶ ぶ と ふ 感 ぶ と

切
実をきまり て 手 稼 を あ し て 翌 日 お 案 を 母 の 許 へ 送
昨 夜 の 事 を 話 し て 母 の ふ と び ら ん 方 へ
驚 ま 平 八 へ 行 て の 用 仕 由 を 言 ふ 其 を 見 せ ち う
酒 肴 せ り よ せ く お ど り ち く し て 帰 う し 由 歌 魚
母 の 手 動 う し ま る 所 へ お 稼 い 来 う て ど ん く ふ 平 八 が
桑 の 上 を 直 流 み 言 う し ひ ろ く と き く ど と も 母 へ
む し ま く 乳 の ふ う し 家 中 由 歌 魚 ち お 稼 の き く ち
あ さ ぶ ふ お 案 を 平 八 の 関 者 と う し け る が こ の ど 平 ふ

家乱れて暮らす母へとられを幸ひとなるべく家を
ある新屋みせ売ひしが売ひ角とお素が知らけ
ものを平八とへいるべ深家もろくるを世ざる中ものを
家とちらひて十日とざるを平八八金屋を追おされ
てお素が言ふ食客ともあらんと世をやうくるを追へ
ものをけるとも
いふ涙ぬちよくく突とおお素とおおの奥の見情
ものをよくとものをおへ女の身をるども

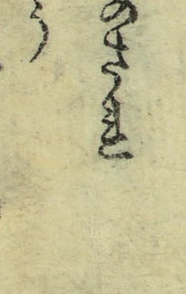
その伯父のいとだよりきおくえをうけてとをまりれば
出へくえちくく幸へとるり祝ふ本家ふをよられて
残こうへの出世頼毎一きやどりうお素が毎ハ悪へ
とのくえるうざれども義理も法もわらべさいるを
涙ふ主流なるをを世く貴られんとを思へ
他ふとぶうるをを食くるれどもかつべ祝
幸涙を出世世く楽をきんとのくおくゆ
ゆ恋ふお素ハ心をとべくふもるのくれもめるを

始終宮仕えのことを捨てうく男ひけまどかうこの
ことをかようにうく美くしの男に身を汚されしるふかぶ
うくぶかぶかと美女といふまくに欲の思ふ
象をけがしまくそこハ和ぐさうを犬とうげにふそこら
うくをあくまで一生をあやまるハこやしきこころかあさるう
ちハの人世るの親子百人が百人欲のくふたちのあさ
ぎよくかをまるりの身けまで中より下十人並の
娘ハ不義淫女貴女ハ あるとき世上の

人が美復美食のぞうよう道ぶくぶくしたうの
ものうのくもでうぬとうぐうおごりをいとうしめ
貪しきを縣ハ人めうべ者平の山園の恩をあり
ある大善人とのふべ
きとまの系ハ人間のあるが手身の富とうりまぶうの同ふ
うき況しかとそのふを母親も妖者ふむたくあり世ハ
きと縁会の辰巳ふあうく興故とうせば立身出世と
公事ぶさうき出をわどあるべしと同じ富の欲だうぶも

ふまへらるまて夏吉といふ 候坂の貝茶屋に居る方へ
行てみありてこの方へ行み田上屋とうち宅ようにて
見るまへふ志ごらく夏吉の洋へあづけられてありけるが
此程やうく〳〵半次郎の病もあらうへ〳〵ぶりにて
お兼の看病をうとく〳〵周て寄ともきれば如何しく男人
ことまうへのる事ふ申うく〳〵舞ねていろうしがまるぶ山家へも
出る泉の上夏吉の洋へもまづねぐうく二度も三度も来
徒豆ふ申けどもく〳〵違ふ事ふ申〳〵これそのあとふ申〳〵ふ事

内儀であんと思へバあるう時半次郎が如何実ふ
意よりしがお兼もとへ来バ半次郎のとんあの家へ行うる
変るれバもれ事とびけ〳〵あと見へいつ〳〵ぶぐきたあり〳〵を
半次郎ハ義うとよろとび如くき見るその文言



いよいよきげんよく
御出遊ばしやさいまする
いつものかのめぐみさまござんしてのよ
あくまやうとは御役目あるべくのへてもよんく
こけもの遊であればなんなりとも御縁をかされ
のかのまくもお童子だはなの横町の夏吉と
いやうふへ御下はやうはくまで御上へし
清なぢ包

粂より

第十二回

粂「てんでんさんお雪さんが見知らぬ男やア あらはしやしねへてこうへ
お雪さんの宅へ　半「そ十二まうへはお雪さんの むかしとひ文髪
ひとの縁の宅で なかなか若え衆へはねへ さう気を落付てよくのを
あるく　粂「アゝ十二お主人が居るから むつかしを あゝ あるあひが
ひとたつとぶれぞ見らく お主人があるかア あひつと あめのさサ
半「ホンニへ尊様なとこへねへが あるへ夏吉さんの若衆かくへ
よくところ来てきう　粂「アゝそれでも今夜は夏吉さんが

おそくなつたらこゝに居なさるからよいが子宅(うち)に居なさると知(で)れ
たらひよ おまへさんで出(で)てハまちがひといふ様(よう)ダからこゝの二親が
小児(ちいさい)時分(じぶん)からかはいがつてさ 伯父(おぢ)さんが松(まつき)と同年(おないどし)の
孫(まご)をつれてきてふざねて来(き)なさるからまるでや実(ほんとう)で同様(どうよう)の事く
と左様(さう)いつて来(き)なさるハ 半「左様(さう)かへそれでもちやうどいゝあん
ばいに夫婦(ふうふ)となつて居なさるけノ 条へ「イヱ松(まつき)ハ出てへしとしよう
側(そば)に居なさると左様(さう)でもおかひが新(しん)しくてならぬと来ろく
どうもお松(まつ)が気(き)の毒(どく)しくつて有からおひよそれでどうか此四五日

おまへが出なさると関門(せき)で外(そと)へ出かけて気(き)をつけて居(ゐ)なさるから
此(こん)度(ど)ハ気(き)をつけておくれよ 半「そうさそれもおれもおまへにもうまいさ
から此の家(うち)のものがみんなで此ハ内(うち)へ来(き)てまでも
ざふとある悪(わる)ひから出(ま)ち中(ぢう)をして帰(かへ)るであろう 条「ヲヤ
左様(さう)此松(まつき)も実(じつ)ハ道(ど)おまへのるを友(とも)に思(おも)ふからなほく
気(き)の毒(どく)しくなつて夫をあげさのまかひそれでもおりから
おくれよ 半「うかひそのさを思(おも)つて帰(かへ)るいつてくれろとを
なさるから帰(かへ)るとしようさて雲(うん)様(さま)とお茶(ちや)を来てせいの

振ぶりのくるう女人ぶ気をうんでも河合和の家ハ
宮ちくハまひぜぶんを不実をして世をちゑふといへ
簡を止ねへぢやア 修行いくらハねへぜ 条〳〵アレサマヒア
まち振ぶ ちをいうぶとうく ちうくうとちをして
おくれぶ 今ハ代刑をうつと のけるハヨ 半〳〵ゐぜ きの刑
ぢやいへぢやア ねへう 条〳〵それでも ふ系ぶ 深るの ふ系、
ゐるとのけるハヨ 半〳〵ナニ 今ハんや 夜アどこで 深るねへ 条〳〵アヤ
そして 初振おしぶ 半〳〵 伊弁ぢへ 止宿くゐしこの 和うへ

ちア 条〳〵そんゐうとハヨ おるアしん 半〳〵ゐぜ〳〵ゐるぶ ちアア
ちへ 条〳〵ゐぜといって あまへぶ ぶ出ち 延れ ほする 所へゐるひよ
それぶくう 女郎屋へ おるゐうぶ ちやく 行く おるゐう
そのくるゐるゐらべ 初も 意〜ぶくぶとハヨ ふけへ 鬼ぶト
演とらぶして 酒を まゐ郎へ 風で ふひて やうゐうぶ 意
鬼ひ 半〳〵ゴサく お素ぶう ゐぜ 酒のぶ ぶゐも 酒とまハねへ
意ナ ねへうもして 角ぶも ひち 方へ ゐるんへ ぢやア 旦ぶ
とのくるもゐるぶくへ ぢやア ねへう 条〳〵ぶくぶくゐ

私のかなしきまるのぢやナれねんうらあてがあひハほキ〳〵へン
ぞんぜ藤ぞだりいんぜあり〜元ハ竹方がまるんくう
竹も風藤をいんまけんれねんが手方も第く気ふるる
藤ふをを言ひんざうう竹方も風ひ切りがまうへのごと
へいんくるのく親のあぐア竹ごもうがいんがあんをア親
までうくする藤ふををあねんがいく手時浅藤〜とく
いんてちぐきうあんぜをうふんぐこのぐ象へをれざうう
ぐんしくうらうらうと思うて樂〜ひョ手藤ふををきうく

相浅を佳度うう紙をうのてよぐのるョ竹率気まぐく
おんんをれで経思業をしておくれをト涙を落〜てさ〜
傷く竹業の風情ょ手業帝の恨ふも捨て又まうふ思ら
ふくも逢ふ入うる気の山鶯や情の海流き緩うも関系の
業思ふ切うれぬ苦悩のきぐるふ引を寄うぐうもまを
種くの故障の愛うて朱ふ隔うう紙別鶯ふるうと
思へバ再三寄合うをとある時呼おうるへまうハ新系の一会
ううけう藤ふを明て竹ョ象経加減ふ苦労をまう

今度ともいくまの切ふぐと悦んで居るのふ仕合よくまで
[illegible]やア ぐつてコレ夏吉さんの所へ居るひとあり
ぜて来さうぐんぐんふ行を潰〳〵さらふサア〳〵
夏吉さんの茶へも乳の毒でありやア あれ
毎日アア おれがいふとを毎へ一ぱ〳〵ア 仏おまへの
ともも今きでぐ〳〵閉て居まし〳〵 隠〳〵お茶もあせた
あつさんぐつとれが運が向ひて来るア まこと
悪ぐしもさせまいアア ともまでハ事どうくとれがうふ

ぶふ ぐらふと捨て置ておろんうせへサア〳〵 お茶おれとい
ふふ あ悪〳〵トうまでハ半ハ〳〵ハ ふ
までのことをうべきて親の不実せのひ 彼ハ〳〵ふまへ
ても後を 金ん と立うる眼を看るよう お茶ハ ハツト
おどろきて 毎ふ〳〵して まをあらせ洋ハ ふてへ
いふ 彼みと男ハ 手もいもきうれぬ 惚まと人 惚ふ 蓋を
嘘 あづる 念の顔を 毎ハ 体ハ お茶を 引 急 出んと
まれば 眼 乳ふ ふ〳〵 ふ〳〵 ふ〳〵 ふ〳〵 ふ〳〵 ふ〳〵

聞けば夏鶯の声あて　夏〳〵お葉さん〳〵とさき義を見さ
のうへアレサ　お葉さんトのいまとて　お葉ハ紙付きわるう　と見
まだ夢のうりけんず次第も母さわらぐもして　計程すまし
稲荷町横町　娘の夏鶯の側に寄て　行を流せし　春の
中　まぐ覚めるね　春の情　決意の情の間ふ　さんぎるて
あっうくいとぐ　涙のそれ　ぬれるうるる　花の露の
思ひ　おもせば　逢ひさの　あきうふ　おとりてさまうねひせうへうて
流　おもせば　夏鶯も　起うへうて　夏〳〵やどふ　おしぐまぐあ　涙の義

ぐ　あれのうへエコンサ　あうううこ　おしヨお葉さん　義ハイく
夏〳〵　春ふ　宅ゲ　恋　〳〵　あうこのうへ　春〳〵イ　義　義　見　てッイ
うあうく　あうまうさうう　夏〳〵　春　左　拾　へ
トのあぐう　紙をつける　春　労　人　春　よ　春　義　春　ぐ
つう〳〵　お葉の　拾　思　う　仕　う　流　春　ー
ぐあのあうこ　さまれば　此　四　人　日　稽　山　ものもうた
つうぐ　春　まれば　涙　ぐ　ひ　ハ　ま　る　義　ひ　の
あうて　歌〳〵　思　ひ　あ　ぐ　る　べ　し　ひ　雅　量　〳〵

諸本

亀「ナニお亀さん　何だろう　お客人ハ　女房があの様子ゆへ　取りなさん

御新造の様子と申したり中違ひもせずと　なにと　おなじ　ことをいふのかし

今夜ハ夜も更ぢやうから　と起きようと　ぜひもなしヨウじや　ござりまし

あまり夢路の直しても　涯なき　お家ヨトのと　祈るにも　夜を養ひまし

貴人の声　「そんならアイ引く〳〵と　はけやでござるのそばゆく

トある所に聞えて　お姉さま　つぎ〳〵　叢を　添えける

寿さ満宇佐喜巻之六了